

郎に向ひ、和尚申されけるは、扱又其方親彌兵衛廿三廻忌に當り、敵と名乗りはる、尋來る事古今ためしなき事なり、さすれば命を助け遣すも第一の追善なり、佛道にも十惡の極罪人も、ほつ心に至れば、是をゆるすと有、きう鳥ふところに入時は、かりう人も是を取らずと有、然れば助るは第一の追善也と申されければ、彌五郎申けるは、御尤には候へども、主と親の敵は共に天をいた、かすと承り、子として父の敵、草の葉を分ても其儘討ざるは、第一の不孝と存じ候間、是非に討て父の讐を復したしとて、中々承引なし、和尚を始め面々も不及是非に、敵討に定りける、最早夜ふけに至りければ、明日家の後の川原にて本望とげべしとて定りける、翌日彌五郎支度を堅め、脇差携出、庄右衛門にむかひ、支度被致候は、立合給へと申ければ、私儀は立合て勝負をとげ申身には無之、御自分の心まかせに討る、身分に候へば、何の支度も無之と申ける、○中和尚横手を打扱は左様なるか、其元はぎ取候者は、此家亭主彌兵衛が實弟にて、若年より惡性者にて、終に盜賊と成りて命を失ひける者なり、然れば弟の身代りに立て、兄彌兵衛は其元の手掛り果ける者也、さすれば此方より求たる惡事にて、敵を討べき道理なし、さるによつて昨日よりかよふのいん縁もあるべきか扣ける、よふ申合たり、此上は敵討に不及とて、何も口々に申けり、彌五郎も面目を失ひ止みにけり、○下

〔傳奇作書附錄上〕復讐見立番附

東都にて一枚摺にしたる板行を見て、珍らしければ爰に出す、此作は全く講釋師等の手にてなれるなるべし、尤も中に遠慮ありてか、異名變名に記せしもあり、東西と分ちたる中央に書たるは、爲御覽、天正山崎主仇討、建久曾我兄弟仇討、永祿藝州廣島仇討、奥に右は往古よりの荒増を相記し候、此に洩れたるは、追て奉入御覽候、

江戸馬喰町三丁目吉田屋小吉板